

岸上慎二編

校訂二卷本枕草子

武藏野書院刊

岸上慎二編

校訂 三卷本枕草子 完

武蔵野書院刊

昭和三十六年 四月二十五日 発行
昭和五十五年 三月二十日 三十三版發行

松尾聰・永井和子共著
枕草子選訳 定価一〇〇〇円

校訂 三卷本枕草子

定価 九〇〇円

編者 岸 上 慎 二

東京都千代田区神田錦町三ノ十一
発行者 前 田 武

東京都荒川区西日暮里五―九―八
印刷者 山 岡 景 恭

東京都千代田区神田錦町三ノ十一
発行所 合名 会社 武蔵野書院

電話 東京 (291) 四八五九番(代)

・振替口座東京九一六七―四六番

郵便番号一〇一

凡 例

一、本書は大学の教科用として、枕草子の完本を編纂しようと志し、三卷本（毫及愚翁本）の忠実な活字翻刻をしたものである。

二、そのために、三卷本のうち、もっとも純粋な本文を伝え、且、もっとも諸伝本の源となったものとして著しい陽明文庫の甲本をもって底本とし、その欠失部（一類本のすべてが今日欠いている部分、本書の一春はあけぼのの七二あぢきなきもの）は、勸修寺家蔵伝教秀自筆本の上巻により補った。

三、三卷本は枕草子中、もっとも研究的に鎌倉の初期の安貞の昔から伝写されてきた本であって、その面影は、勘物、朱点によって、今日においても如実にうけ伝えられている。なお、章段分合についても朱〇、朱合点、改行によって十分にその研究成果が伝えられている。本書はそういう面について、出来る限り原形を損うことのないように注意して活字化した。

四、右の目的のため、勘物は頭注欄に△印をつけ原文のままに掲げた。

五、頭注は、当時の時代、社会を理解する助けとして、時代的に近い倭名抄、拾芥抄などを多く引用した。

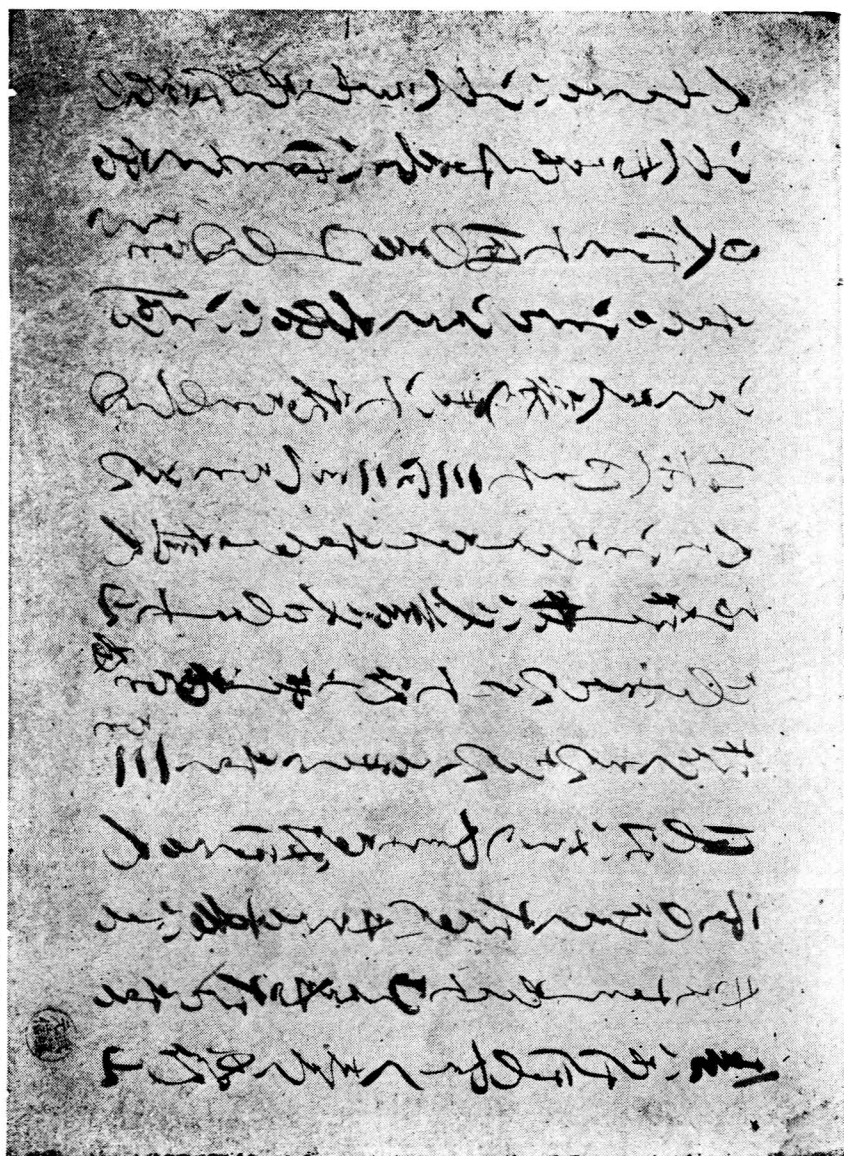
六、巻末に参考文献として、清少納言集を翻刻し、清少納言の和歌の集成も企てた。

七、その他研究の榮となるものを付しこの書物をなかたちとして研究に志す友の一人でも多からん事を願った。

八、陽明文庫本を底本にえらぶことをお許し下さった文庫に対して心から感謝を捧げるものである。

九、付図は武蔵野書院編集部の御尽力によるものであり、本文中では右肩小数字によりその所在を示した。

昭和三十六年正月十日
編者しるす



二月十一日列見八月二日定考 有銚鏝於官廳行之
二月上丁日大學寮釋傳奉拜孔子有聰明世教宜混食歟

眞

二月官乃ほくさみかう定といふとさるがふと
ふわん^{孔子}かへけさるなりさるなり
そめ^明とてうかもふそわ^成きもあき
かとうもあふりくまふ次頭^成なりなり
主殿司念あやうなり扱とまろきまけり
ていじめれなりいさうさるなりはせり
なり念やわんといそきさるなりさる
んといさるとさるなりさるなり
さるなりさるなりさるなりさるなり
いんつていさるなりさるなりさるなり

おはきやまに
 いへるありや
 硯のたえよ
 つらきんじり
 山もされ花
 えいよてかりぬ
 とくめゆひの
 こゝろを
 人の心をつ
 いちぢうにい
 おいこわ
 まーけし

目次

一	春は曙……………	二五
二	比は……………	二五
三	正月一日は……………	二五
四	同じことなれども聞き耳ことなるもの……………	二六
五	思はん子を法師になしたらんこそ……………	二六
六	大進生昌が家に……………	二九
七	うへにさぶらふ御猫は……………	三三
八	正月一日、三月三日は……………	三四
九	よろこび奏すること……………	三五
*	今内裏の東をば……………	三五
*	定澄僧都に桂なし……………	三五
一〇	山は……………	三五
一一	市は……………	三五
一二	峯は……………	二六
一三	原は……………	二六
一四	淵は……………	二六
一五	海は……………	二六

一六	みささぎは……………	二六
一七	わたりは……………	二六
一八	たちは……………	二六
一九	家は……………	二六
二〇	清涼殿の丑寅の隅の……………	二七
*	生ひ先なく、まめやかにえせざいはひなど……………	二七
二一	見てゐたらん人は……………	三三
二二	すさまじきもの……………	三三
二三	たゆまるるもの……………	三四
二四	人にあなづらるるもの……………	三四
二五	にくきもの……………	三四
二六	心ときめきするもの……………	三七
二七	過ぎにしかた恋しきもの……………	三七
二八	心ゆくもの……………	三七
二九	檳榔毛は……………	三六
三〇	説経の講師は……………	三六
三一	菩提といふ寺に……………	四〇

目次

三二	小白河といふ所は………	四〇
三二	七月ばかりいみじう暑ければ………	四〇
三三	木の花は………	四〇
三四	池は………	四〇
三五	せちは………	四〇
三六	花の木ならぬは………	四〇
三七	鳥は………	四〇
三八	あてなるもの………	四〇
三九	虫は………	四〇
四〇	七月ばかりに、風いたう吹きて………	四〇
四一	にげなきもの………	四〇
四二	細殿に人あまた、あて………	四〇
四三	主殿司こそ………	四〇
四四	をのこは、また隨身こそ………	四〇
四五	職の御曹司の西面の立部のもとにて………	四〇
四六	馬は………	四〇
四七	牛は………	四〇
四八	猫は………	四〇
四九	雑色・隨身は………	四〇
五〇	小舎人童………	四〇

五一	牛飼は………	五二
五二	殿上の名対面こそ………	五二
五三	若くよろしき男の………	五二
五四	若き人・ちごどもなどは………	五二
五五	よき家の中門あけて………	五二
五六	滝は………	五二
五七	河は………	五二
五八	曉に帰らん人は………	五二
五九	橋は………	五二
六〇	里は………	五二
六一	草は………	五二
六二	草の花は………	五二
六三	集は………	五二
六四	歌の題は………	五二
六五	おほつかなきもの………	五二
六六	たとしへなきもの………	五二
六七	* 夜鳥どものあて………	五二
六八	しのびたる所にありては………	五二
六八	懸想人にて来たるは………	五二
六九	ありがたきもの………	五二

七〇	内裏の局・細殿いみじうをかし……………	六六	八九	あさましきもの……………	四四
*	まいて、臨時の祭の調染などは……………	六六	九〇	口をしきもの……………	四四
七	職の御曹司におはしますころ、木立など……………	六六	九一	五月の御精進のほど……………	四五
七二	あぢきなきもの……………	六六	九二	職におはしますころ……………	四〇
七三	心地よげなるもの……………	六六	九三	御かたがた、君達、上人など……………	四一
七四	御仏名のまたの日……………	六六	九四	中納言まゐりたまひて……………	四一
七五	頭の中將の、すずろなるそら言を聞きて……………	六六	九五	雨のうちへ降るころ……………	四二
七六	返る年の二月二十余日……………	三七	九六	淑景舎、東宮にまゐりたまふほどの事など……………	四三
七七	里にまかでたるに……………	三七	九七	殿上より、梅のみな散りたる枝を……………	四六
七八	もののはれ知らせ顔なるもの……………	三七	九八	二月つごもりごろに……………	四六
七九	さて、その左衛門の陣などに行きて後……………	三七	九九	はるかなるもの……………	四六
八〇	職の御曹司におはしますころ、西の廂に……………	三七	一〇〇	方弘は……………	四六
八一	めでたきもの……………	三七	一〇一	見苦しきもの……………	四六
八二	なまめかしきもの……………	三七	一〇二	言ひにくきもの……………	四六
八三	宮の五節出ださせたまふに……………	三七	一〇三	関は……………	四六
八四	内裏は、五節のころこそ……………	三七	一〇四	森は……………	四六
八五	無名といふ琵琶の御琴を……………	三七	一〇五	原は……………	四六
八六	上の御局の御簾の前にて……………	三七	一〇六	四月のつごもりがたに、初瀬に詣でて……………	四六
八七	ねたきもの……………	三七	一〇七	常よりことにきこゆるもの……………	四六
八八	かたはらいいたきもの……………	三七	一〇八	絵にかき劣りするもの……………	四六

一〇九	かきまさりするもの……………	二三	二二八	五月ばかり、月もなういと暗きに……………	二七
一一〇	冬は……………	二三	(二九)	円融院の御はての年……………	二九
一一一	あはれなるもの……………	二三	一三〇	つれづれなるもの……………	二三
一二二	正月に寺にこもりたるは……………	二四	一三一	つれづれ慰むもの……………	二三
一二三	いみじう心づきなきもの……………	二七	一三二	とりどころなきもの……………	二三
一二四	わびしげに見ゆるもの……………	二八	一三三	なほめでたきこと……………	二三
一二五	暑げなるもの……………	二八	一三四	殿などのおはしまさで後……………	二四
一二六	恥づかしきもの……………	二八	一三五	正月十余日のほど、空いと黒う……………	二七
一二七	むとくなるもの……………	二九	一三六	清げなる男の、雙六を……………	二八
一二八	修法は……………	三〇	一三七	碁を、やむごとなき人のうつとて……………	二八
一二九	はしたなきもの……………	三〇	一三八	おそろしげなるもの……………	二八
＊	八幡の行幸のかへらせたまふに……………	三〇	一三九	清しと見ゆるもの……………	二八
一二〇	関白殿、黒戸より出でさせたまふとて……………	三三	一四〇	いやしげなるもの……………	二八
一二一	九月ばかり、夜一夜、降り明かしつる雨の……………	三三	一四一	胸つぶるるもの……………	二九
一二二	七日の日の若菜を……………	三三	一四二	うつくしきもの……………	二九
一二三	二月、官の司に……………	三三	一四三	人ばへするもの……………	二九
(二四)	頭の弁の御もとより……………	三三	一四四	名おそろしきもの……………	二九
一二五	などて官、得はじめたる六位の笏に……………	三四	一四五	見るにことなることなきものの文字に書……………	二九
一二六	故殿の御ために……………	三五		きてことごとしきもの……………	二九
(二七)	頭の弁の、職にまゐりたまひて……………	三六	一四六	むつかしげなるもの……………	二九

一四七	えせものところ得るをり……………	一四二	一六四	大夫は……………	一五三
一四八	苦しげなるもの……………	一四三	一六五	法師は……………	一五三
一四九	うらやましげなるもの……………	一四三	一六六	女は……………	一五三
一五〇	とくゆかしきもの……………	一四三	一六七	六位の蔵人などは……………	一五三
一五一	心もとなきもの……………	一四四	一六八	女の一人住む所は……………	一五三
一五二	故殿の御服のころ……………	一四五	一六九	宮仕人の里なども……………	一五三
＊	宰相の中將・齊信・宣方の中將・道方の少 納言などまゐりたまへるに……………	一四六	一七〇	ある所に何の君とか言ひける人のもとに……………	一五三
＊	弘徽殿とは閑院の……………	一四六	一七一	雪のいと高うはあらで、うすらかに降り たるなどは……………	一五三
一五三	昔おぼえて不用なるもの……………	一五〇	一七二	村上の前帝の御時に……………	一五三
一五四	たのもしげなきもの……………	一五〇	一七三	御形の宣旨の……………	一五三
一五五	読経は……………	一五〇	一七四	宮にはじめてまゐりたるころ……………	一五三
一五六	近うて遠きもの……………	一五〇	一七五	したり顔なるもの……………	一五三
一五七	遠くて近きもの……………	一五〇	一七六	位こそ、なほめでたきものはあれ……………	一五三
一五八	井は……………	一五〇	一七七	かしこきものは乳母の男こそあれ……………	一五三
一五九	野は……………	一五〇	一七八	病は……………	一五三
一六〇	上達部は……………	一五〇	＊	十八九ばかりなる人の髪いとうるはしくて……………	一五三
一六一	君達は……………	一五〇	一七九	すぎずきしくて独住みする人の……………	一五三
一六二	〔受領は〕……………	一五〇	一八〇	いみじう暑き昼なかに……………	一五三
一六三	権の守は……………	一五〇	一八一	南ならずは、東の廂の板のかげ見ゆばか……………	一五三

りなるに……………	一五	二〇〇 弾くものは……………	二五
一八二 大路近なるところにて聞けば……………	一五	二〇一 笛は……………	二五
一八三 ふと心おとりとかするものは……………	一六	<u>二〇二</u> 見ものは……………	二五
一八四 宮仕人のもとに來などする男の……………	一六	* 賀茂の臨時の祭……………	二五
一八五 風は……………	一六	二〇三 五月ばかりなどに山里にありく……………	二五
* 野分のまたの日こそ……………	一六	二〇四 いみじう暑きころ……………	二五
一八六 心にくきもの……………	一六	二〇五 五月四日の夕つかた……………	二五
一八七 島は……………	一七	二〇六 賀茂へまゐる道に……………	二五
一八八 浜は……………	一七	二〇七 八月晦日、太秦にまうづとて……………	二五
一八九 浦は……………	一七	二〇八 九月二十日あまりのほど……………	二五
一九〇 森は……………	一七	二〇九 清水などにまゐりて……………	二五
一九一 寺は……………	一七	二一〇 五月の菖蒲の……………	二五
一九二 経は……………	一七	二一一 よくたきしめたる薰物の……………	二五
一九三 仏は……………	一七	二一二 月のいと明かきに……………	二五
一九四 書は……………	一七	二一三 大きにてよきもの……………	二五
一九五 物語は……………	一七	二一四 短くてありぬべきもの……………	二五
一九六 陀羅尼は……………	一七	二一五 人の家につきづきしきもの……………	二五
一九七 あそびは……………	一七	二一六 物へ行く道に……………	二五
一九八 あそびわざは……………	一七	二一七 よろづの車よりも、わびしげなる車に……………	二五
一九九 舞は……………	一七	二一八 細殿に便なき人なん曉に……………	二五

二二九	三条の宮におはしますころ……………	一三
二二〇	御乳母の大輔の命婦……………	一三
二二一	清水にこもりたりしに……………	一三
二二二	むまやは……………	一三
二二三	社は……………	一三
二二四	一条の院をば今内裏とぞいふ……………	一六
二二五	身をかへて天人などはかうやあらむと見 ゆるものは……………	一七
二二六	雪高う降りていまもなほ降るに……………	一七
二二七	細殿の遣戸をいとうおしあげたれば……………	一七
二二八	岡は……………	一八
二二九	降るものは……………	一八
二三〇	日は……………	一八
二三一	月は……………	一八
二三二	星は……………	一八
二三三	雲は……………	一八
二三四	さわがしきもの……………	一八
二三五	ないがしろなるもの……………	一八
二三六	ことばなめげなるもの……………	一八
二三七	さかしきもの……………	一九

目次

二三八	ただ過ぎに過ぐるもの……………	一六
二三九	ことに人に知られぬもの……………	一六
二四〇	文詞なめき人こそ……………	一九
二四一	いみじうきたなきもの……………	一九
二四二	せめておそろしきもの……………	一九
二四三	たのもしきもの……………	一九
二四四	いみじうしたてて婿取りたるに……………	一九
二四五	世のなかになほいと心憂きものは……………	一九
二四六	男こそなほいとありがたく……………	一九
二四七	よろづのことよりも情あるこそ……………	一九
二四八	人のうへ言ふを腹立つ人こそ……………	一九
二四九	人の顔にとりわきてよしと見ゆる所は……………	一九
二五〇	こだいの人の、指責着たるこそ……………	一九
二五一	十月十余日の月いと明かき……………	一九
二五二	成信の中將こそ……………	一九
二五三	大蔵卿ばかり……………	一九
二五四	うれしきもの……………	一九
二五五	御前にて人々とも、また、物仰せらるる ついでなどにも……………	一九
二五六	関白殿、二月二十一日に法興院の積善寺……………	一九

という御堂にて……………	二九	二七六	雪のいと高う降りたるを、例ならず……………	三九
二五七 たふときこと……………	三三	二七七	陰陽師のもとなる小童こそ……………	三〇
二五八 歌は……………	三三	二七八	三月ばかり、もの忌しにて……………	三〇
二五九 指貫は……………	三三	二七九	十二月二十四日、宮の御仏名の……………	三二
二六〇 狩衣は……………	三三	二八〇	宮仕へする人々の、出で集まりて……………	三三
二六一 単衣は……………	三三	二八一	見ならひするもの……………	三三
二六二 下襲は……………	三三	二八二	うちとくまじきもの……………	三三
二六三 扇の骨は……………	三三	二八三	右衛門の尉なりける者の……………	三四
二六四 檜扇は……………	三三	二八四	小原の殿の御母上とこそは……………	三五
二六五 神は……………	三三	二八五	また葉平の中將のもとに……………	三五
二六六 崎は……………	三三	二八六	をかしと思ふ歌を……………	三五
二六七 屋は……………	三三	二八七	よろしき男を、下衆女などのほめて……………	三五
二六八 時奏する……………	三四	二八八	左右の衛門の尉を判官といふ名つけて……………	三五
二六九 日のうらうらとある昼つかた……………	三四	二八九	大納言殿まありたまひて……………	三六
二七〇 成信の中將は、入道兵部卿の宮の御子にて……………	三四	二九〇	僧都の御乳母のままだと……………	三七
二七一 常に文おこする人の……………	三七	二九一	男は女親なくなりて、男親の一人ある……………	三六
二七二 きらきらしきもの……………	三八	二九二	ある女房の……………	三六
二七三 神のいたう鳴るをりに……………	三九	二九三	便なきところにて……………	三九
二七四 坤元録の御屏風こそ……………	三九	二九四	まことにや、やがては下ると……………	三九
二七五 節分違へなどして……………	三九	一本		

目次	一	夜まさりするもの……………	三〇
	二	日影におとるもの……………	三〇
	三	聞きにくきもの……………	三〇
	四	文字に書いてあるやうあらめど心得ぬもの……………	三〇
	五	下の心かまへてわろくて清げに見ゆるもの……………	三〇
	六	女の上着は……………	三三
	七	唐衣は……………	三三
	八	裳は……………	三三
	九	汗衫は……………	三三
	一〇	織物は……………	三三
	一一	あやの紋は……………	三三
	一二	薄様色紙は……………	三三
	一三	硯の箱は……………	三三
	一四	筆は……………	三三
	一五	墨は……………	三三
	一六	貝は……………	三三
	一七	櫛の箱は……………	三三
	一八	鏡は……………	三三

一九	蒔絵は……………	三三
二〇	火桶は……………	三三
二一	畳は……………	三三
二二	檳榔毛は……………	三三
二三	松の木立ち高き所の……………	三三
二四	宮仕へ所は……………	三四
二五	荒れたる家の蓬深く……………	三四
二六	初瀬にまうでて、局に居たりしに……………	三四
二七	女房のまゐりまかでは……………	三五
二九五	この草子、目に見え、心に思ふことを……………	三六
二九六	左中将……………	三六
一	清少納言集……………	四三
二	清少納言集(異本)……………	四七
三	枕草子に含まれる和歌連歌一覧……………	五三
四	私家集などによる増補清少納言和歌……………	五五
五	関係系図……………	五七
六	人名一覧……………	六四
七	枕草子年表……………	七二
	枕草子関係絵図……………	